

細石器 (Ⅱ)

——幾何学形細石器の分類とその歩み——

藤本 強

1

本紀要の9に「細石器 (Ⅰ)」として、細石器のもつ意味およびソ連と北海道の資料の比較を行ったが、その際、今後数回にわたり、継続して細石器について考えていきたいとする趣旨のことを述べている(藤本 1990)。しかし、本紀要の10には種々の事情により、全く別の内容のものを掲載せざるを得ず、一度掲載を休むことになってしまった。本稿では、細石器の中でも、ユーラシア大陸西部、広義の地中海をめぐる地域に、独特の発達を見せる幾何学形細石器の分類とその研究のたどってきた道筋を中心にしながら、幾何学形細石器に関する種々の問題について、考えてみることにする。

幾何学形細石器は、西・中央・東ヨーロッパ、北アフリカ、西アジアなどの地域に広く見られ、これらの地域では、地域により出現と存続の年代を異にするが、ある時期、それぞれの地域の石器群の主体をなしている。その他の地域では、石器群のなかで中心的な石器になることはほとんどないようである。これには現在の情勢下では、という断り書きが必要であろう。調査の密なところ、粗なところがあり、現在の幾何学形細石器の分布が、そのまま実体を現しているか、どうかについては、かなり問題もあろうかと思われる。1980年代以降、これまでに調査がなされていなかった北アフリカや西アジアの砂漠の中の調査が実施されるようになり、多くの新たな事実もたらされている。しかしながら、多くの地域でかなりの数の調査がなされており、そこでは一応の編年もでき上がっているので、現在の大勢は大きく変わることはないものと予測される。

中央アジア、南アジア、あるいはサハラ以南のアフリカでも、幾何学形細石器が出土しており、今後、それらがかなりの量になる可能性は残されているが、こうした地域においても、それが石器群の主体を占めるまでには至らないものと推測される。なぜ、幾何学形細石器が作られるようになり、その分布が地中海をめぐる地域を中心とするのかなどの多くの謎が、未解決のまま残されている。また、幾何学形細石器の起源が単数なのか、複数なのかの問題も、依然、大きな課題として残っている。

西・中央・東ヨーロッパ、北アフリカ、西アジアの地域では、幾何学形細石器の製作はマイクロ・ビュラン (microburin) 技法と呼ばれる特殊な細石器製作の技法と密接に結びついているようで

る。とはいっても、すべての幾何学形細石器が、マイクロ・ビュラン技法で製作されているかといえ
ば、必ずしもそうではなく、また逆にマイクロ・ビュラン技法で製作された非幾何学形細石器、石鏃
などもかなりの量が見られる場合もある。大局的に見れば、幾何学形細石器とマイクロ・ビュラン技
法は緊密な関係があるように思われるが、幾何学形細石器が、必ずマイクロ・ビュラン技法によっ
て作られるとか、マイクロ・ビュラン技法があれば、必ず幾何学形細石器があるというような必要に
して十分な関係にはない。

地球規模で見た場合、幾何学形細石器およびマイクロ・ビュランは広義の環地中海地域を中心にし
た地域に集中して見られる。これが何を意味しているのかは、多くの議論のあるところである。幾
何学形細石器の分布がようやく明らかになってきた1920～30年代においては、これらの幾何学形細
石器の存在とマイクロ・ビュラン技法によるその製作が、当時の時代風潮もあり、すべて伝播したも
のとする傾向が強かった。その多くはナイル河流域を初めとする北アフリカに起源を求めるもの
であった。「光は東方より」が一つの時代風潮であり、伝播論全盛の当時においては、当然の成り
行きであるとも考えられる。

また、ナイル河流域のコム・オンボ周辺における E. Vignard による Sebilian の発見 (1923,
1928, 1935) はこうした時代風潮にマッチしたものであり、幾何学形細石器およびマイクロ・ビュ
ラン技法の起源はナイル河流域にあり、ここから海岸沿いに北アフリカの各地へ、また西アジアへと
拡散し、さらに、南と東からヨーロッパにもたらされたと言われていた (Zotz 1932など)。ちょうど
ヨーロッパでは、各地で幾何学形細石器を持つ石器群がかなり発見され、あるいは前後関係がその
なかにあるのではないかとされていた時期であった。また、西アジアのナトゥフ文化、北アフリカ
のカプサ文化、イベロ・マウル文化 (当時の呼び名、現在はオラン文化と呼ばれるのが普通であ
る) などの幾何学形細石器とマイクロ・ビュラン技法を持つ石器群が広く地中海をめぐる地域で発見
され始めた時期でもあった。さらに、中央ヨーロッパ、東ヨーロッパにおいても幾何学形細石器と
マイクロ・ビュラン技法の存在が確認されていた。

当時はマイクロ・ビュラン自体も、それを目的として作られた石器と考える研究者がかなりの数い
て、マイクロ・ビュランが第一義的な目的をもった刻器として作られたのか、細石器を作る際の副産
物であるのか、熱い議論が戦わされていた。この決着がついたのは、マイクロ・ビュランには使用痕
がほとんどないということが明らかにされたからである。

このような状況の時に、Vignard により、従来、先史時代の調査がほとんどなされていなかった
ナイル河のコム・オンボ近くのセビルにおいて、たいへんに興味深い発見がなされたという報告が
出された。ナイル河の段丘面との対比で異なった石器群が発見されたというものである。それは、
より高位の段丘には、ルヴァロワ剥片を素材にして、幾何学形に二次加工された大型の石器がある
Sebilien I が、中位の段丘面には、中型のやはり幾何学形の石器がある Sebilien II があり、それ
にはマイクロ・ビュラン的な技法により加工されている石器がある。さらに低位の段丘面には、小型
の石刃を素材にした、マイクロ・ビュラン技法による幾何学形の細石器が中心の Sebilien III がある

細石器 (II)

という内容のものであった。

段丘面ごとに別種の石器があり、それには系統関係が考えられ、次第に小型化している。しかも素材はルヴァロワ剥片から小型の石刃に移行している。さらに中間段階のものも存在しているということで、大きな反響を呼んだものである。マイクロ・ビュラン技法による幾何学形細石器がルヴァロワ剥片による幾何学形の石器から系統をたどることができ、時期を異にすると考えることが妥当な段丘面ごとに変化しているという内容であったので、マイクロ・ビュラン技法による幾何学形細石器の起源はこれで決まったとする風潮が強くなったのも、当時としては当然であったものと考えられる。

現在では、ナイル河流域のマイクロ・ビュラン技法による幾何学形細石器をもつ石器群の多くは、再編成され、他の名称で呼ばれていて、大型の幾何学形の石器が主の石器群のみが *Sebilien* として、更新世の最終末期に位置付けられている。Vignard の調査のもつ意味は大きく変わってしまっている。したがって、マイクロ・ビュラン技法による幾何学形細石器の起源を北アフリカに求めることは困難になってきている。このことについては後でも触れるが、地域地域により、主になる幾何学形細石器の器種が異なること、出現の様相が違うことなどから、単一の起源は考えにくい。むしろ地域地域で幾何学形細石器に先行する石器の中から独自に誕生した可能性が強くなっている。そうした研究の状況を受け、かつて北アフリカと南ヨーロッパをつなぐ意味で、イベロ・マウル文化と呼ばれていた石器群が、オラン文化と呼ばれるようになってもいる。

こうした状況にあり、なぜ幾何学形細石器という特殊な石器が地中海沿岸地域に広範囲にほぼ近い時期に見られるようになるのかという疑問が生れよう。しかもそれはマイクロ・ビュラン技法という、これまた特殊な技法とこれらの地域で密接な関係があるのかという疑問とも関連してくる。マイクロ・ビュラン技法と密接な関連のある幾何学形細石器が単一起源で、伝播によりこの広大な地域に広がったと考えるならば、比較的考えやすいのであるが、現在の状況では、地域地域の様相はあまりにも違いすぎている。同様な疑問は細石器についても発せられるものである。ほぼ同じ時期の旧世界の各地域の石器が、なぜ一斉に細石器化するのでしょうかという問である。

こうした質問に対する答はまだ出されてはいないし、今後も完全な形の答が出ることはまずないものと思われる。前回の「細石器 (I)」で、その一つの原因は移動を主にした生活が旧世界の中で行われるようになったことへの対応ではないかとしているが、これも部分的な解答でしかない。まして幾何学形細石器の盛行とは何の関わりもないことである。このような世界的な現象でありながら、その間にほとんど有機的な脈絡のない現象の解釈に、「機能による収斂現象」であるとか、「遺伝子の流れの方向」などの証明が不可能な提唱がなされることがあるが、筆者はこうした考え方に与したくない。自然との関わりあいのなかでの人間の側の選択の結果と考えたい。幾何学形細石器と非幾何学形細石器の差は、柄につける際の地域による伝統の差というような考え方で解釈したいと思っている。

単一起源伝播論と複数起源の間で、やや横道にそれたが、このような1920から30年代の単一起源

伝播論全盛の時代を過ぎて、1950年代になると、複数起源が復権してきて今日に至っている。資料的にも、細石器、幾何学形細石器、マイクロ・ビュラン技法についても、複数起源説を支える資料が増加している。しかも従来考えられていたような単一系統のものでなく、複数系統のものが一定の地域で入り乱れていることが明らかにされているのも、昨今の状況である。

2

幾何学形細石器の分類は、当初は台形、三角形、半月形、長方形、菱形というような正にその形と幾何学で通常なされている形態との類似で行なわれていた。こうした分類は、この種の石器が小型であることから「ピグミー・フリント」と呼ばれた19世紀以来行なわれ、研究者によっては、あるいは幾何学形細石器があまり多く出土しない地域もしくは、国においては、そのままの形が踏襲されている。幾何学形細石器が細かく分類されるようになるのは、1950年代になり、F. Bordes によって始められた、石器をタイプによって分類し、それをごく初歩的ではあるが、統計的に分析する方法が、先史考古学の世界にもち込まれるようになってからである。Bordes の方法は、彼自身により、前期、中期旧石器文化の石器群の分析に使用されたのは、周知の事実であろう。1950年にまず初めものが発表され(1950)、現在もこの時期の石器群の分析に利用されることのある完成した形で発表されるのはやや遅れ、一年ほどたってからである。ついで、この方法は後期旧石器文化にも応用される(Sonneville-Bordes de et Perrot 1953)。この分類の詳細は4回にわけて、雑誌に掲載されるが(Sonneville-Bordes de et Perrot 1954, 1955, 1956a, 1956b)、そのうちの4回目のもので、タイプ・リストの79~83に、幾何学形の石器という形で、取り上げられている(Sonneville Bordes de et Perrot 1956b: 552, 554, 557)。

79 Triangle, 80 Rectangle, 81 Trapèze, 82 Rhombe, 83 Segment de cercle である。このタイプ・リストはあくまでも後期旧石器文化の分析が目的のものであるので、後期旧石器時代には、多く出現しない幾何学形細石器については、最小限の5分類に留めているのであろうが、それまでの伝統的な分類を踏襲しているのは、興味深い。

このような石器群の分析方法は、終末期旧石器文化(Epipaléolithique)、あるいは中石器文化(Mésolithique)にも利用されるようになり、いくつかの方法が提唱されている。こうしたもののなかで比較的初期に出た二つの方法をまず見ることにする。両者とも複数の論文の形で雑誌に発表されており、この時期の石器群の対比・分析に利用され、こうした方法を基礎にして、地方色が豊かになっているこの時期の石器群の系統関係の把握が試みられている。ただ、どちらの方法もその後他の研究者がこれらの方法を使用して、石器群の分析を行った例をほとんど知らない。比較的短命な方法であったということができよう。

一つは、G. Laplace-Jauretche によるものであり、最初の論文は、1954年に発表されている(1954)。全石器を57タイプに分類している。そのなかの40~48が幾何学形細石器であり、ほかに関連するものとして、マイクロ・ビュランが2種、37と38にあげられている。その幾何学形細石器の

細 石 器 (II)

分類は以下のようなものである。

- 40 Segment de cercle, 41 Triangle scalène, 42 Triangle, 43 Pointe du Tardenois et de Sonchamps, 44 Trapèze scalène, 45 Pointe de Vielle, 46 Trapèze isocèle, 47 Rhomboïde, 48 Rectangle

この分類の特色は、三角形と台形の幾何学形細石器がそれぞれ3タイプに細分されたところにある。それに従来からの標準遺物的な石器の名称がそのなかに付けられていることも目を引くものである。三角形においても、台形においても等辺と不等辺の概念が入ってきている。43はペン先形の細石器とも呼ばれることがあるものである。不等辺三角形で、二辺が二次加工されていて、二次加工のある二辺のうちの長い辺は直線であるが、短い辺は凹線になっているものである。また、45は台形の細石器である。多くのものは細石刃の側縁の部分には二次加工がなく、二つある裁断面の片側は側縁に直角であるが、他方は側縁と斜めに交差する特徴をもっている。基本的には幾何学形を5分類し、そのなかの三角形と台形をそれぞれ三つに細分している。

G. Laplace-Jauretche のこのあとに続く論文では、分類が最初のものとは変化している。1956と1957年に出た論文は同一の分類を使用しているが、タイプ・リストは50に減少している。それとともに1954年の論文にはなかった大分類がなされ、石器はまず11の大分類がなされる。そのなかに幾何学形細石器グループが設けられている。そのほかの石器の大分類というのは、刻器、鋸歯状石器、削器、截断面をもつ石器、背付きの石器、尖頭器、石鏃、二次加工のある石刃、二次加工のある剥片、その他の石器からなっている。

他の大分類のなかでも同様であるが、大分類された石器は中分類され、さらに小分類されるという3層構造の分類がなされている。それは以下のとおりである。

- | | | | |
|-----------|------------------------|-------------|---------------------|
| A Segment | 32 Segment | B Triangle | 33 Triangle scalène |
| | | | 34 Triangle isocèle |
| C Trapèze | 35 Trapèze asymétrique | D Rectangle | 38 Rectangle |
| | 36 Trapèze isocèle | | |
| | 37 Rhombe | | |

Triangle と Trapèze がそれぞれ二つになり、名称から遺跡名を冠したものがなくなり、形態が前面に出てきたこと、Rhombe が Trapèze のなかに入れられたことが大きな変化といえよう。内容的には、5分類の内容をもっているが、形の上では、4分類になったことが、分類の面では、大きな変化である。それとともに、3層構造の分類にしている点が大きな違いであろう。最初の論文では、それまでの標準遺物にかなりこだわった分類にしていたものを、このような機械的な分類にしたことは、ある意味では評価できよう。標準遺物にこだわった分類をしている限り、その分類は地域的に狭い範囲の分類にならざるを得ない。より広い範囲の石器群の相互対比には、使用不能な分類になってしまう。

Laplace の1966年の著書も若干の変化はあるが、基本的にはこの分類を踏襲している。幾何学形

細石器は、Gm（幾何学形細石器）の名称の下に8細分され、それぞれ詳細な定義がなされている（1966:67-71）。

Gm 1 Segment de cercle,	Gm 2 Segment trapézoïdal	Gm 3 Triangle scalène,
Gm 4 Triangle isocèle,	Gm 5 Trapèze scalène,	Gm 6 Trapèze isocèle,
Gm 7 Trapèze de rectangle,	Gm 8 Rhomboïde	

2の Segment trapézoïdal と7の Trapèze de rectangle が新たに設けられ、Rectangle がなくなっている。Rectangle を幾何学形細石器から除く分類は他のものでも見られる。Triangle の二分はそのままであり、Trapèze が三分されている。7は片側の截断面が側縁に直角で、片側の截断面は側縁と斜めに交わるものである。総じて言えば、比較的簡単な分類である。

他の分類は、M. Escalon de Fonton と H. de Lumley によるものである。これは最初の論文が1955年に出されている。ある意味では、たいへんに複雑な内容をもった方法である。器種の大分類と各石器群ごとの標準遺物による分類という二重構造をもった分類になっている。意図はわからないでもないが、石器の名称に振り回されすぎた分類という様相が強いように思われる。

石器は83に分類される。1～10には、特徴のない後期旧石器文化（Leptolithique という言葉が用いられる。文字通りに訳せば、軽石器ということになるが、ここでは、若干ニュアンスは異なるが、後期旧石器という言葉に置き換え記述する）的な石刃、細石刃がまとめられる。11～37には、後期旧石器文化に主として出現する石器が置かれている。このなかには、13 Segment de cercle (sans coup de microburin) および33 Triangle leptolithique が入っている。38～63に終末期旧石器文化の石器が置かれる。削器、抉入石器などの石器が含まれる。細石器ではなく、Rozoy のいう「基本的な石器」にあたるものである。このなかの38～44がモンタド文化に特徴的に現われる石器だとしている。

64～75にも終末期旧石器文化の石器が置かれるが、これは幾何学形細石器を中心にしていて、以下にこれを列挙する。

64 Demi-lune (avec coup de microburin),	65 Rhombe,	66 Triangle mugien,
67 Triangle sauveterrien à retouche rectiligne,	68 Triangle sauveterrien à retouche concave,	69 Pointe de Sauveterre,
70 Trapèze irrégulier à retouche rectiligne,	71 Trapèze régulier à retouche rectiligne,	72 Trapèze irrégulier à retouche concave,
73 Trapèze régulier à retouche concave,	74 Pointe du Tardenois,	75 Pointe de Sonchamp

徹底的な標準遺物に偏した分類である。実際の石器を具体的に分類をする際にどうするのだろうかかと疑問のある分類である。曖昧な部分が多く、しかも、細かな定義はまったくない。一人の研究者が自己規制をしながら、この方法を使用するのならばまだいいが、他の研究者が追体験しようとしても、それは不可能な分類である。76には、アストゥール文化のピックが、77～79には、新石器文化に関係する石鏃などが置かれる。80～83には、この分析で主として取り上げられるイタリア、

細 石 器 (II)

スペイン、ポルトガル、フランス南部の終末期旧石器文化には特徴的に出現しない石器が置かれている。このなかに80 Rectangle がある。色々なところに幾何学形細石器が登場する。しかも、奇妙なことに、69, 74, 75は幾何学形細石器には含まれていない。名称に尖頭器が冠されているためなのであろうか。69はともかく、74と75は完全に三角形の石器の作り方と同一である。確かに通常剥離したまの刃部が残されるところに、これらの石器では、二次加工が施され、三角形の各辺すべてが加工される。幾何学形細石器の定義に、一辺は剥離のまま残されるというのがあるものがあるので、三辺がすべて加工されることのあるこれらの石器を除外するという理屈も成り立つことはあろう。しかしながら、製法はきわめて近い。極端な言い方をすれば、石器を図にするのにどのように置くかにより、尖頭器的な性格を強調することもできるし、幾何学形細石器的な性格を強調することもできる。基本的には、幾何学形細石器に属すると考えるのが妥当である。ところが、後で触れる幾何学形細石器指数の計算には、これらは含まれていない。指数は何のための指数なのであろうか。いささか理解に苦しむところのある論文である。

こうした石器の分類に加えて、番外の形でマイクロ・ビュランがa～cの3種類に分類され、さらに西欧世界のこの時期の石器の分類には、珍しく、やはり番外として、石核が4類に分けられている。西欧世界では、石核の様相はほとんど顧みられないのが通常である。この点は、石核がもっとも問題にされるわが国のこの時期の分析とは対照的である。色々な意味でたいへんにユニークな分類である。この石器のタイプ・リストを使用して、通常なされているような百分率の累積グラフを描くとともに、32種類の指数をだし、その相互比較をしている。この膨大な指数を出すところにこの方法の最大の特徴があるように考えられる。

指数には実にさまざまなものが含まれている。後期旧石器文化指数、地中海終末期旧石器文化指数、終末期旧石器文化指数、新石器文化指数、ロマネリ・アジュール文化指数、モンタド文化指数、イタリア文化指数、ムージェ文化指数、ロマネリ幾何学形細石器指数、ソーヴェテール文化指数、タルデノワ文化指数、アストゥール文化指数など32の指数が設けられている。ここに例示していないものの多くは、技術的な側面を主にしたものである。このような指数のなかに幾何学形細石器指数というのがある。これはタイプ・リストの13, 33, 63～68, 70～73, 78, 80～82に典型的なマイクロ・ビュランを加えたものを石器のタイプ・リストの5～83に典型的なマイクロ・ビュランを加えたもので除し、百分率にしたものである。先にも触れているように、タルデノワ、ソンジャン尖頭器は幾何学形細石器から除外されている。これらは、典型的な幾何学形細石器であり、名称に尖頭器と付いているからといって、これを幾何学形細石器から除外するのは、納得できない。この著者の幾何学形細石器の分類は、三角形と台形がそれぞれ特徴的に現れる文化の名称を使用しつつ、細かく細分されているのが最大の特徴である。

この方法のもう一つの特徴は、標準遺物を重視し、それによって、それぞれの石器群の所属を決めようとするところにある。それが石器分類の上でも二重構造にならざるを得なかったし、また各種の文化の名前を冠した指数がかなりの数設けられることにもつながっていよう。しかし、これら

の指数の多くは、一つの器種によって設定されており、その有効性については、すこぶる疑問である。1955年の論文は方法の提唱とモンタド文化の分析がなされ、56、57年の論文はこの方法の応用による個々の遺跡の分析と考察からなっている。実際の遺跡の分析においてこれらの数多い指数が有効に分析に利用できているかといえば、きわめて疑問である。

あまり、深く石器の様相を考えずに提唱された方法ということができよう。統計的な処理がこの時期においても可能であり、それによって、従来とは異なる角度で見ることができるともかもしれないという理由で、提唱された方法である。何が何でも旧来の標準遺物を基礎にして、分類をしようという事で考案された方法である。標準遺物を重視するのであれば、標準遺物から分析すればいいのに、敢えて、こうした方法の中にそれをあからさまな形で持ち込む意図がよくわからない。

タイプ・リストを作り、器種ごとに分け、石器群を対比する方法は、あまりにも標準遺物偏重になり、石器群のトータルな構造がわからなくなったため、それを改善し、量的な意味を持ち込むことにより解決しようとした方法にはほかならない。それなのに、標準遺物を重視したのでは、方法自体の意味がなくなるように思われる。このような点で、さらに標準遺物重視と機械的な分類とが併存し、二重構造になっている点、わかりにくい部分がある方法である。

前に触れた二つのものとは、目的をまったく異にするが、標準的な幾何学形細石器の分類が提唱されている(Leroi-Gourhan 1966:262, 263)。この分類は、石器の形態の記述のためというのが主な目的であるが、石器の標準的な分類の一つの典型で、内容も穏当なものと考えられるので、触れておく。それは以下のような10の器種に分類するものである。

fléchette, rectangle, demi-cercle, segment de cercle, triangle isocèle, triangle rectangle, triangle scalène, trapèze, trapèze rectangle, losange

標準的な5大分類に、鏃形が加わり、半円形と弦形が分離し、三角形が二等辺三角形、直角三角形、不等辺三角形と三分され、台形が通常台形と片側の截断面が刃部と直角に交わる台形とに二分されている。幾何学形細石器に鏃形が入るのはいささか奇異なところもあるが、すぐ前の方法のなかで触れているように、この時期の石器で、尖頭器という名称で呼ばれている一群を分析するためには、妥当な方法かと思われる。大きな特徴もないが、旧大陸西部の幾何学形細石器の標準的な分類であろう。

石器についての記述では、定評のある Brézillon 1983 に簡単に触れておく。Géométrie の項 (:228) では、三角形、長方形、台形、菱形、半円形の5種が挙げられ、ごく短い記述があるだけである。Microlithe の項 (:272-274) では、19世紀以来の代表的な例を挙げ、比較的長い記述がなされている。個々の器種の記述はそれぞれあるが、長方形、菱形、半円形については、ごく簡単な記載があるだけである。三角形と台形については、代表的な例の図もついたかなり長い記述がある。5種に分類し、そのうちの三角形と台形が詳しく記述されるという西欧、特にフランスの学界の特徴を代表しているものである。

地域を異にするが、終末期旧石器文化についてのタイプ・リストを使って分析するための本格的な分類は、1963年、J. Tixier によりはじめてなされる。これは、北アフリカのマグレブ地方の終末期旧石器文化の石器群の分析のために考案されたものであり、従来の研究の成果を大幅に取り入れ、石器のもつ意味を十分に考慮した上で提唱された分類であり、その後のいろいろな石器分類に大きな影響を与えているし、発表後30年近くたった今日でも、生きた分類として、北アフリカの石器群の分析・記述に使用されている。この著書については、既に芹沢長介氏の紹介があるし(1974)、筆者も形式と分類の紹介をする際に、主要部分について簡単に触れている(藤本 1976:190-198)。分類全体の内容については、そちらに譲り、ここでは幾何学形細石器に関連する部分についてのみ見ていくことにする。

これまでに見てきたものと違うのは、分類に技術的・形態の観察の背景が豊富にあること、さらに、石器の分類とはこうあるべきだという哲学が感じられるものである。前稿でも触れているように、細石刃、細石器の分類基準にしても確固たる哲学があったのと同様に、幾何学形細石器の分類にあっても、明確な哲学が貫かれているように思われる。非幾何学形の細石器の分類にあっては、標準的な遺跡の名称を冠したものが散見されるが、幾何学形細石器にあっては、こうしたものはまったくなく、明快なほど機械的に分類している。

しかし、これはあくまでもマグレブの石器群の分析に使用するのが目的であるので、そこできわめて稀な石器とか、出土のないものはタイプ・リストに挙げられないことになる。このあたりが、終末期旧石器文化のタイプ・リストによる石器群の分析の泣き所ということができよう。つまり、地方色がたいへんに豊かになってきているので、環地中海地域に普遍的なタイプ・リストを作るとすれば、大分類にならざるを得ないので、小地域における分類には有効でなく、さりとて、細かい分類を行なえば、煩瑣になり、空白が多くなるという矛盾を抱えることになる。このような方法が最初に行なわれた中期旧石器文化では、石器の器種も少なく、変異も少ないので、環地中海地域に共通する分類基準を設けることができるし、その基準によって、相互比較をすることが可能であった。ところが、後期旧石器文化になると、フランスを中心にした地域で作られたものは、そこだけでしか使用することができず、より広い範囲をカバーしようとするれば、大分類になるか、煩雑なものにせざるを得なくなる。

まして、より地方色が豊かな終末期旧石器文化にあっては、この矛盾はより大きなものになってしまう。たいへんによくできたタイプ・リストではあるが、こうした限界があるため、その利用はマグレブを中心にした北アフリカに限られるのも致し方のないところである。石器全体はその他の石器を含め、112に分類されている。それらは11の器種ごとの大項目にまとめられている。その内の一つが幾何学形細石器であり、そのなかは82~100の19種に細分されている。以下にタイプ・リストを掲げ、やや詳しく見ていくことにする(図1, 2)。

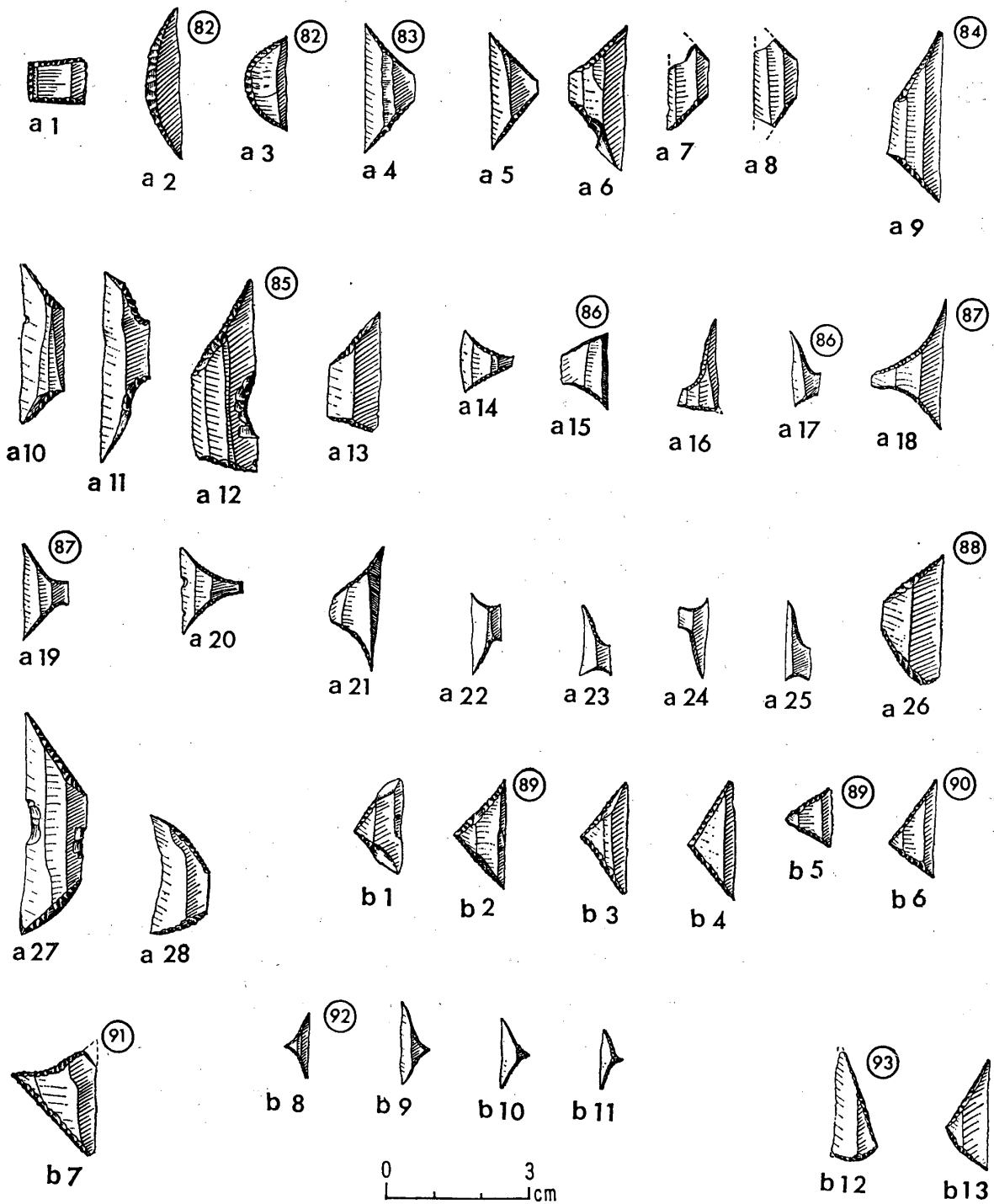


図1 Tixier (1963) の細石器の分類 a 1: rectangle, a 2: segment, a 3: demi-cercle, a 4, 5, 7, 8: trapèze isocèle, a 6: trapèze isocèle inachevé, a 9, 10: trapèze dissymétrique, a 11: trapèze dissymétrique inachevé, a 12, 13: trapèze rectangle, a 14-17: trapèze à un côté concave, a 18-25: trapèze à deux côtés concaves, a 26, 27: trapèze à côté convexe, a 28: trapèze à deux côtés convexes, b 1: triangle isocèle inachevé, b 2-4: triangle isocèle, b 5: triangle équilatéral, b 6: triangle scalène, b 7: triangle à un côté concave, b 8-11: triangle à deux côtés concaves, b 12: triangle à un côté convexe, b 13: triangle à un côté légèrement convexe.

細石器 (II)

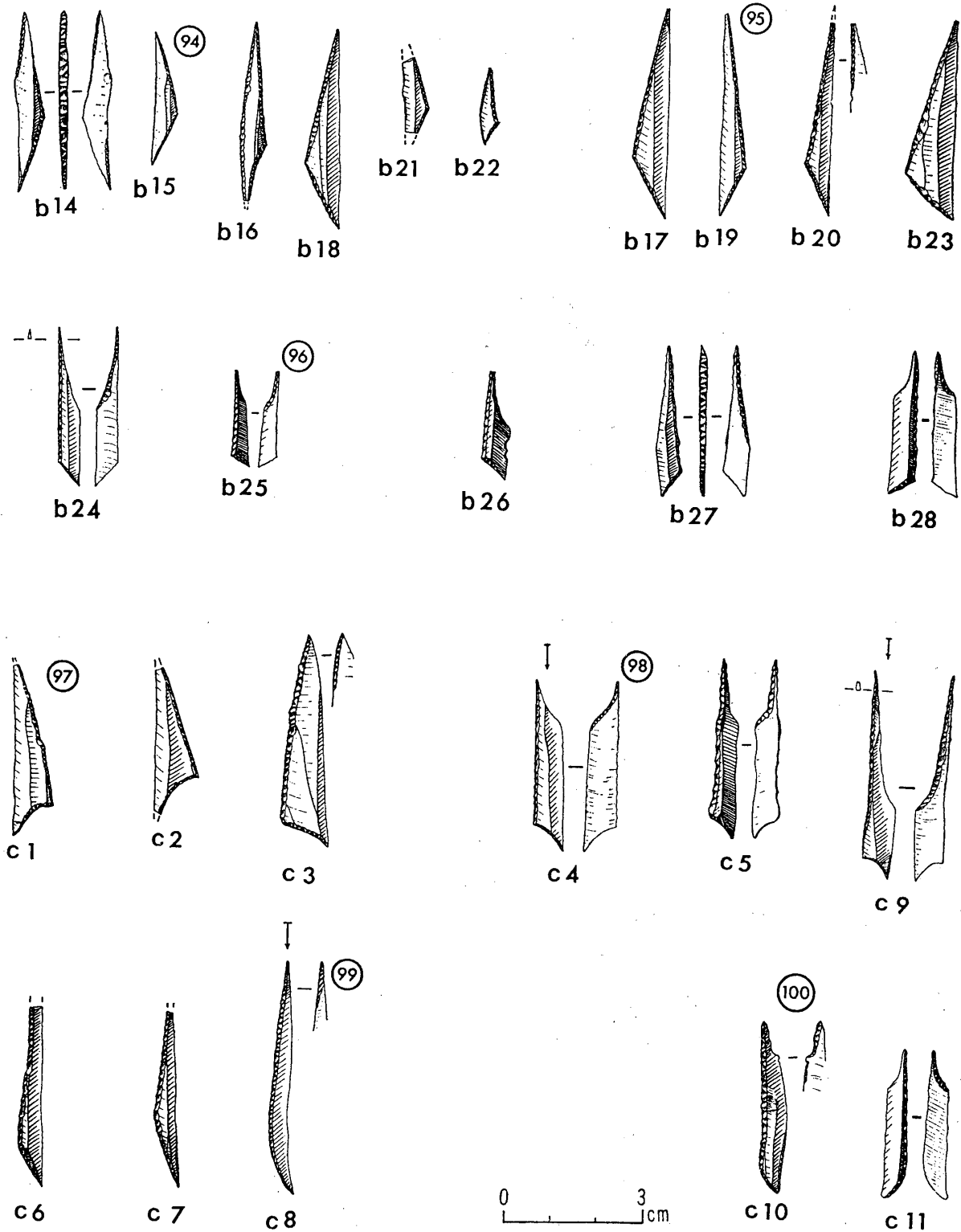


図2 Tixier (1963) の細石器の分類 b 14-16, 18, 21, 22: triangle scalène allongé, b 17, 19, 20, 23: triangle scalène allongé à petit côté court, b 24-28: scalène-perçoir, c 1-3: triangle scalène allongé à petit côté concave, c 4, 5, 9: scalène-perçoir à petit côté concave, c 6-8: triangle scalène allongé à angle arrondi, c 10, 11: scalène-perçoir à angle arrondi.

- 82 Segment ou demi-cercle, 83 Trapèze isocèle, 84 Trapeze dissymétrique,
 85 Trapèze rectangle, 86 Trapèze à un côté concave, 87 Trapèze à deux côtés
 concaves, 88 Trapèze à un côté convexe, 89 Triangle isocèle ou équilatéral,
 90 Triangle scalène, 91 Triangle à un côté concave, 92 Triangle à deux
 côtés concaves, 93 Triangle à un côté convexe, 94 Triangle scalène allongé,
 95 Triangle scalène allongé à petit côté court, 96 Scalène-perçoir, 97 Triangle
 scalène allongé à petit côté concave, 98 Scalène-perçoir à petit côté concave,
 99 Triangle scalène allongé à angle arrondi, 100 Scalène-perçoir à angle arrondi.

82は多く説明を要しないものである。名称を二つ挙げているが、どちらもよく使われるものである。タイプ・リストには挙げられていないが、記述と挿図には Rectangle についても触れられている。これをリストからはずしたのは、出土例がきわめて少ないからにはほかならない。83~88には、Trapèze がまとめられている。83は二つの截断面が対称形になるもの、84は二つの截断面が非対称形のもの、85は片側の截断面は側縁に対し斜めであるが、もう一方のものは側縁と直角に交わっているもの、これは西アジアのタイプ・リストにある Trapèze-rectangle とはまったく異なるものである。86~88には、截断面が直線ではなく凹状もしくは凸状をしているものである。機械的に分類をするならば両側の截断面が凸状になるものも設けられるはずであるが、出土がないためか、タイプ・リストには挙がっていない。

89~95, 97, 99は Triangle である。96, 98, 100には、Triangle の特殊なものをまとめている。Triangle の細分が目立つ。これはマグレブ地域の特殊な事情による。この地域には、カプサ文化と呼ばれる幾何学形細石器が異常とってよいほどに発達した文化がある。それはTrapèze も多数あるが、Triangle も多種多様なものが多数ある。そこで細かな細分がなされている。89は二等辺三角形もしくは、正三角形、90は不等辺三角形、91~93は截断面が凹状もしくは凸状のもの、Trapèze と同じ分類項目を立て、分類に統一性が見られる。

94~100 に長三角形のものを集める。これは刃部（三角形の底辺）が幅（三角形の高さ）の4倍以上のものを長三角形としているものである。94は二つの截断面の長さがあまり変わらないものであるが、95~100 は二つの截断面の長さに大きな差があるものであり、短辺は刃部の三分の一以下のものとする定義されている。長三角形の幾何学形細石器は特にカプサ文化によくあるものであり、短辺の形により、さらに細分されている。

このなかの96, 98, 100 はきわめて特殊なもので、当時、上部カプサ文化と呼ばれていた石器群の最末期に特徴的に出現し、その後続くカプサ文化の伝統をもつ新石器文化には、もはや見られないというものである。これらは不等辺長三角形の長辺側の先端近くに、刃部にも二次加工を加えるという特徴で分類されているものである。基本的には不等辺長三角形でありながら、刃部に加工があるということで、分離されたものである。この二次加工は、多くは主剥離面側になされるもので、鋭い尖端が作られている。不等辺錐という名称ではあるが、果たして、錐として使用されたも

細石器 (II)

のか疑問がある。Tixier も触れているが、これらの石器はきわめて破損しやすく、多くは破片で出土しているようである。固い材質のものに穴を開けることなど不可能ではないかと思われるほどの細さであり、また、刃部の二次加工の度合いも多彩である。時期的にきわめて限られた形で出現するので、標準遺物にすることのできる器種である。

この幾何学形細石器の分類は、基本的には、半円形、三角形、台形と分類し、そのなかをこの地域の特性に合わせ、細分しているものである。それは、特に三角形と台形において著しい。先にも若干触れているように、この地域には、カプサ文化と呼ばれる、世界的に見ても異常とも言える幾何学形細石器を発達させている文化がある。幾何学形細石器のなかでも、特に三角形と台形が多様であり、かつ多彩に発達している。マイクロ・ビュラン技法の発達も世界で一番といっても過言ではない。そこでこれだけの分類になるのである。一方、長方形、菱形はほとんどなく、また、半円形のものもなくはないが、数はきわめて少ない。こうした幾何学形細石器の地域的な特性に合わせ、作られた分類である。したがって、これを他の地域の幾何学形細石器の分類に使用することは不可能であるが、実によくできた分類である。

その背景には、Tixier の製作実験をも含む幅広い石器製作技術に関する知識及び、マグレブのこの時期の石器を数多く観察している体験がある。それはタイプ・リストの記述、技術に関する記載のなかに現われている。前稿でみた細石器や細石刃の定義の際に使用されている数値、今回のタイプ・リストの定義の時に使われる数値は、皆マグレブの石器群の具体的な資料の計測を基本にして設定されたものである。それぞれの石器の定義にしても、個々のタイプ・リストを分離するか、統合するかの判断にしても、その基本には、マグレブの石器についての豊富な観察がある。

そうした石器全般にわたる基本的な理解に加え、石器分類に関する哲学のある、さらに言うならば、こうしたタイプ・リストを作り、石器群を分析して、その先に何をみようとしているのかがわかかっていて、作成されたものとも言うことができる分類である。このようなものが背景にあるだけに、そのままの形では使用することはできないが、他の地域のタイプ・リストを作成する際に、もっとも参考にされている分類である。また、今日でも北アフリカの終末期旧石器文化の分析に利用されているタイプ・リストである。

ここで、幾何学形細石器の製作と密接な関係にあるマイクロ・ビュラン技法について、Tixier 1963 に主としてよりながらみることにしたい。Tixier のタイプ・リストには、マイクロ・ビュラン技法という項目があり、そのなかに、101 *Lame ou lamelle à piquant-trièdre*, 102 *Microburin*, 103 *Microburin Krukowski* が挙げられている。101 は背つきの石刃もしくは細石刃の端部にマイクロ・ビュランを取った跡のあるもの、102 は通常マイクロ・ビュランで、これらには近端のマイクロ・ビュラン (*microburin proximal*) と遠端のマイクロ・ビュラン (*microburin distal*) があり、前者は素材の打瘤をもっており、後者は素材の先端をもっている。特殊なものに両端が二つのマイクロ・ビュランになっているもの (*microburin double*) がある。103はマイクロ・ビュランは通常、素材に扶りをいれ、そこに打撃を加えるが、これは素材の刃潰しされた背に打撃を加え、マイクロ・ビュラン

に類するものにしたものである。Tixierは細かな観察を基にして、マイクロ・ビュランについて記述している。

マイクロ・ビュランの存在については、19世紀に記述があるが、その技法と細石器の関係、その製作技術などについて、論文が書かれるようになるのは、20世紀になってからである。E. Octobon (1935など)、E. Vignard (1936など)らにより、具体的な製作の様相などが論議されてきた。それらを基にしながら、J. Tixierはよりこの技法を掘り下げ、その製作技術を明らかにしている。さらに、当時、ようやくマイクロ・ビュランが幾何学形細石器製作の際の単なる副産物であり、それ自体を目的にしたものではないことが定着しつつあったが、マグレブのマイクロ・ビュランの観察により、マイクロ・ビュランがほとんど使われていないことなどを理由に、副産物であることを明確にしている。マイクロ・ビュラン技法の復元については、最近でもまだ論議がなされている (Albarello 1987)。

この Tixier の著作を参考にしながら、西アジアの後期旧石器時代から終末期旧石器時代の石器群についてのタイプ・リストが作られている (Hours 1974)。この論文には、Hours のタイプ・リストの基になった1969年のロンドンにおける国際シンポジウムで議論されたタイプ・リストも併載されている。両者の幾何学形細石器の項を見ることにする。まず、俗にロンドン・リストと呼ばれるロンドンの国際会議のタイプ・リストを見る。このタイプ・リストについては英語が仏語とともに使われている。ここでは () 内に英語を記載する。これは石器を13に大別している。その中が細分されるという分類である。幾何学形細石器の分類は以下の通りである。

- | | |
|---|--|
| 1 lamelle bitronquée (bitruncated bladelet), | 2 lamelle étroite à dos bitronquée |
| (narrow backed and bitruncated bladelet), | 3 quadrilatère (trapeze-rectangle), |
| 4 rectangle ou trapèze à une extrémité cassée (trapeze-rectangle with an end broken), | |
| 5 quadrilatère irrégulier (truncated triangle), | 6 rectangle ou trapèze à retouche de Héliouan (trapeze-rectangle with Helwan retouch), |
| 7 triangle isocèle ou scalène court à retouches abruptes (short abruptly-retouched isocèles or scalene triangle), | |
| 8 triangle scalène allongé à retouches abruptes (elongated scalene triangle with abrupt retouch), | 9 triangle à retouches de Héliouan (triangle with Helwan retouch), |
| 10 triangle à retouches de Barajné (triangle with Barajne retouch), | 11 segment de cercle à retouches abruptes (lunate with abrupt retouch), |
| 12 segment de cercle atypique (atypical lunate), | 13 segment de cercle à retouches de Héliouan (lunate with Helwan retouch) |

これに大分類としてのマイクロ・ビュラン技法がつき、microburin, microburin Krukowski, piquant trièdre, lamelle à bord abattu plus piquant trièdre に細分されている。

Hours自身のタイプ・リストは詳しいものと広い地域の広域対比用との二種類からなっている。広域対比用のものは詳しいものをいくつかのタイプごとにまとめたものである。石器は15に大分類

細石器 (II)

され、ナンバーのつく中分類がされ、その中がさらに小分類される。いわば、三層構造の分類である。小分類のものは () 内に記載する。幾何学形細石器は7の中分類がなされている。ロンドン・シンポジウムのものに、かなり大幅な変更が加えられている。

- 1 triangle scalène allongé, 2 triangle scalène court (petit côté direct, petit côté inverse), 3 trapèze rectangle (complet <deux côtés retouchés>, incomplet <un côté retouché>), 4 trapèze (petite base à retouches directes, petite base à retouches inverses, petite base non retouchée), 5 triangle isocèle, 6 segment de cercle (à bord abattu, à bord Héliouan), 7 divers (trapèze irrégulier, etc.)

これにマイクロ・ビュラン技法の項がつくが、それはロンドン・シンポジウムによるタイプ・リストと同様である。これをまとめたものが Hours の言う縮小形のタイプ・リストである。その幾何学形細石器の項は5分類されている。それは、triangle(1, 2, 5), trapèze rectangle(3), trapèze(4), segment de cercle(6), divers(7)である。() 内が詳細なリストの番号である。これに加えてマイクロ・ビュラン技法の項があるが、それは一つのタイプにまとめられている。

以上、煩雑ではあるが、西アジアの石器群の分類のために考案された二つのタイプ・リストを掲載した。西アジアの特色が出ているタイプ・リストである。西アジアの地域に多い幾何学形細石器に焦点をあてたタイプ・リストといふことができよう。西アジアでは、台形と三角形のものは比較的少数であり、segment de cercle と、ここで3とされている trapèze rectangle が主体となっている。この石器は、ヨーロッパで同じ名前と呼ばれているものとは、まったく違うものであり、混同は避けなければならない。ヨーロッパの trapèze rectangle は台形の側面の片方が刃部に直角に交わっているものであり、西アジアのものは、台形とも長方形とも言える形の一群の幾何学形細石器をこの名称で呼んでいるものである。これらの多くはかなり細長く、刃部の反対側の側縁も二次加工されているものが多い。これはジオメトリック・ケバランと呼ばれる石器群に特徴的に出現する石器である。segment de cercle も西アジアの幾何学形細石器を代表する石器で、ナトゥフィアンを特徴づける石器である。また、ヘルワン型の二次加工にも配慮はなされている。

西アジアに多数見られる石器についての配慮はあるものの、あまり特徴のあるタイプ・リストとはいえない。triangle の3分類に西アジアで何の意味があるのだろうか。ヨーロッパ、北アフリカの分類に大きく影響を受け、そこから脱し切れていない分類である。

西アジアの石器の記載では定評のある A. Marks の用語解説 (1976) のなかでは、細石器関係の記載は、主として Tixier (1963) によりながら、なされているが、報告のなかに、この時期の遺跡がないため、幾何学形細石器の項目はない。

4

西ヨーロッパ、特にフランスとベルギーの終末期旧石器文化もしくは中石器文化の総合的な石器分類のタイプ・リストは1969~1975年に発表された G. E. E. M. のものである (1969, 1972,

1975)。G. E. E. M. は、le Groupe d'Etude de l'Épipaléolithique-Mésolithique の略であり、途中で若干のメンバーの交替はあるが、フランスを中心にした10人ほどのこの時期の主な研究者が参加している共同研究グループである。当初は、北アフリカのこの時期の古くからの研究者、E. Vignard, あるいは J. Tixier もグループに参加しており、フランスのこの時期の研究をリードしていた R. Daniel, M. Escalon de Fonton は終始このグループに属している。こうしたところから考えると、従来の研究の集大成ともいえる趣のあるタイプ・リストとすることができよう。また、このグループの中心的な役割を果たしていたと考えられる J. G. Rozoy の著作(1978)もこの分類によって、分析がなされている。

前稿でも触れているように、このタイプ・リストの特色は石器を大きく、「outillage du fonds commun」と「armature」に二分するところにある。「armature」はさらに二分され、幾何学形細石器と非幾何学形細石器に分けられる。ここでは、幾何学形細石器に焦点をあて、見ていくことにする。このタイプ・リストは用意周到に準備されていたようで、日常よく使われている考古学上の言葉についても、詳細な定義をしているし、図を掲載するに際しても、図の上部に、個々の石器の何をもっていくのか、どの部分を図の右側に置くとか、左側に置くとかいうように、非常に詳細な規定を設けている。図の置き方により、石器の印象はまったく違うことにもなるので、こうした詳細な規定を設けることは、必要であろう。また計測に際しても、長さ・幅・厚さをはじめとする計測点を詳細に設定している。こと、分類に限って言えば、Triangle と Trapèze の分類がやや詳細すぎて、グループに関係していない研究者がこのタイプ・リストを利用して石器の記述や分析をするには困難を伴うことになろう。

このタイプ・リストの最初の論文、1969年の論文では、幾何学形細石器が取り上げられる。このなかで、タイプ・リスト全体の構成、使われる用語の定義、幾何学形細石器の図を描く際の留意事項が述べられた後、幾何学形細石器の分類が述べられる。1972年の論文では、armature のなかの幾何学形細石器を除いた部分が記述され、1975年の論文で、outillage du fonds commun が記載されている。

幾何学形細石器の分類は大きく Triangle, Segment de cercle, Trapèze に分けられる。通常 Rectangle に分類されるものは、ここでは, bitronqué として幾何学形細石器から除外されている (:360)。また, Rhomboïde は大分類としての Trapèze のなかに入れられている。ここが、これまでに見てきた分類と異なる点である。Rectangle はヨーロッパでは、稀な石器であり、このような分類もわからないではないが、Trapèze の項で、二つの截断面の間が幅の二倍以上あるものを除外すると規定しているのは、若干問題があるのではないかと思われる。

Triangle

まず、Triangle は、二つの截断面の組み合わせにより、得られる三角形のものとして規定され、第三の辺は、二次加工されることもあるが、直線であるとされている。13に分類されている。標準遺跡の名称をもつものが、かなりの部分を占めている。以下、それらを Triangle を略し、列挙し

細石器 (II)

ていく。() 内に概略の定義を述べる。

isocèle (二つの截断面が等しく、それらの間の角度が直角もしくはそれ以上であるもの、截断面の交点は、長さの中間点から、長さの10%以上偏っていないこと) <図 3・3-22>

isocèle allongé (長さが幅の4倍以上ある isocèle) <図 3・1, 2>

de Muge (等辺もしくは不等辺の三角形のもので、截断面が凹状であり、その結果、截断面の交点が突出しているもの) <図 3・26-31>

de Muge allongé (de Muge のなかで、長さが幅の4倍以上あるもの) <図 3・23-25>

scalène (二つの截断面の長さが等しくなく、その交点が、長さの中間点から、長さの10%以上偏っているもの) <図 3・32-57>

scalène irrégulier (scalène のうち、截断面が曲がりくねっているもの) <図 3・58-60>

scalène allongé (scalène のなかで、長さが幅の4倍以上のもの) <図 3・71-75>

scalène allongé à petite troncature courte (scalène allongé のなかで、短い截断面が長い截断面の1/3以下のもの) <図 3・76-80>

de Montclus (scalène allongé à petite troncature courte のなかで、もっとも長い、通常二次加工されない辺に急傾斜の二次加工がなされたもの、二次加工は端部近くでは、急傾斜になるのが普通である。長さは通常20mm以下である) <図 3・81-85>

scalène à petite troncature concave (scalène の短い截断面が凹状のもの) <図 3・61-70>

de Fère (長い截断面が、通常二次加工のない第3の辺よりも長いもの、この種の石器の幅は素材となった細石刃もしくは石刃の幅と同一である) <図 3・91, 92>

de Châteauneuf (de Fère と同様の内容であるが、両截断面が凹状であるもの) <図 3・93, 94>

de Coincy (形は二等辺三角形であるが、長い截断面と通常二次加工のない第3の辺の長さが等しいもの、長い截断面は直線であるが、短い截断面は軽い凹状となる) <図 3・86-90>

Segment de cercle

半円形。半円をなす弧状の部分は通常、急傾斜の二次加工がなされる。これは刃潰しによることもあれば、截断面が連結することもある。直線の部分は、素材の刃のままか、部分的に半急傾斜の二次加工がなされることもある。3に分類されている。この種の石器はヨーロッパには比較的少ないものである。したがって、標準遺跡名を付けたものはなく、規格や形を基礎にした機械的な分類のみである。Triangle と Trapèze とは大きな違いである。Triangle 同様にタイプを列挙し、定義の概略を述べる。

Segment (形容はなく、以下の分類には入らないものを、すべてこのなかに入れるという受動的な分類である) <図 3・95-115, 図 4・116-124>

Segment asymétrique (弧状の部分の二次加工が対称形でないもの) <図 4・130-137>

Segment large (幅が長さの1/3を超えるもの) <図 4・125-129>

Trapèze

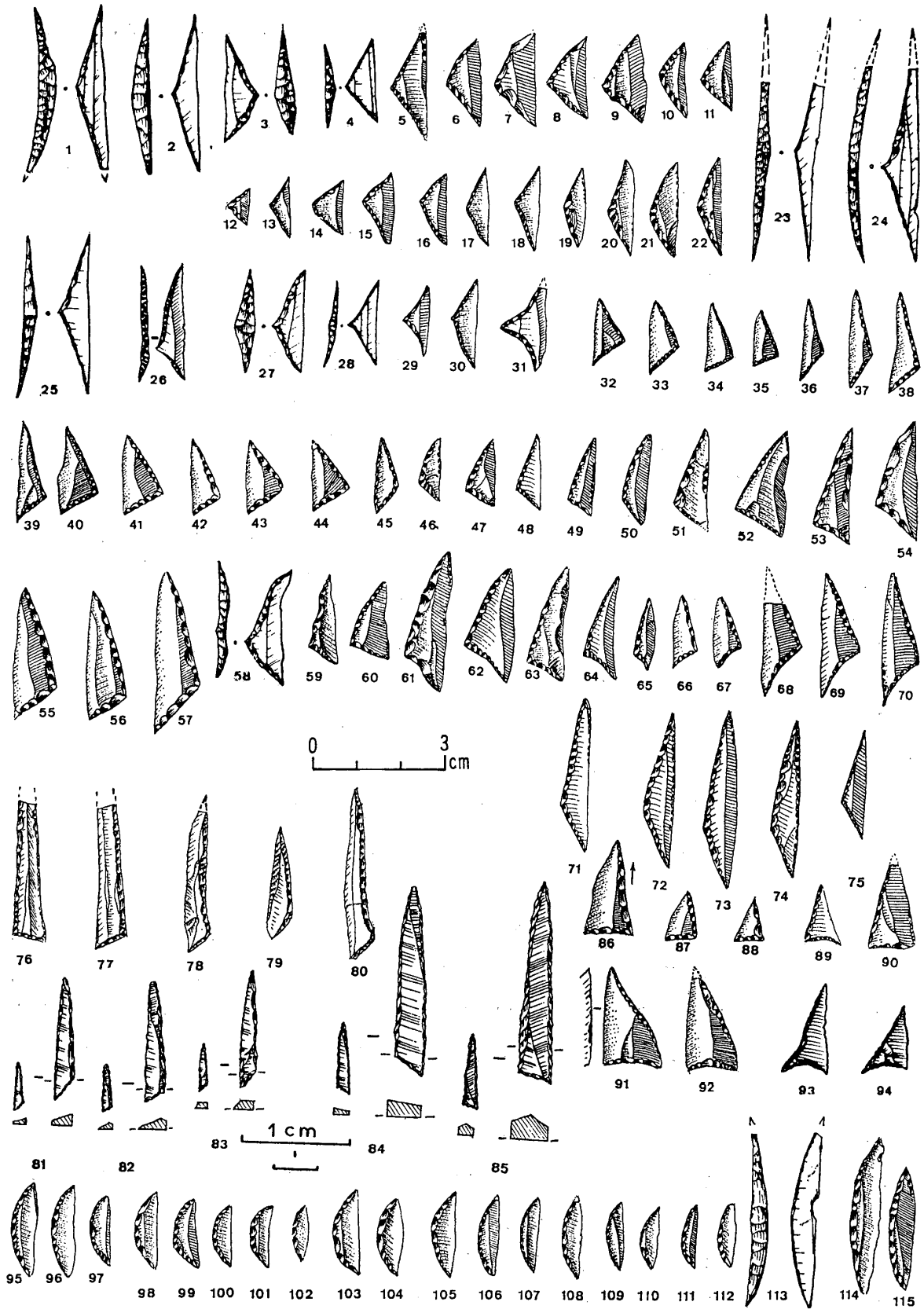


図3 G. E. E. M. (1969) の細石器の分類 (石器の番号は本文中に記載)

細石器 (II)

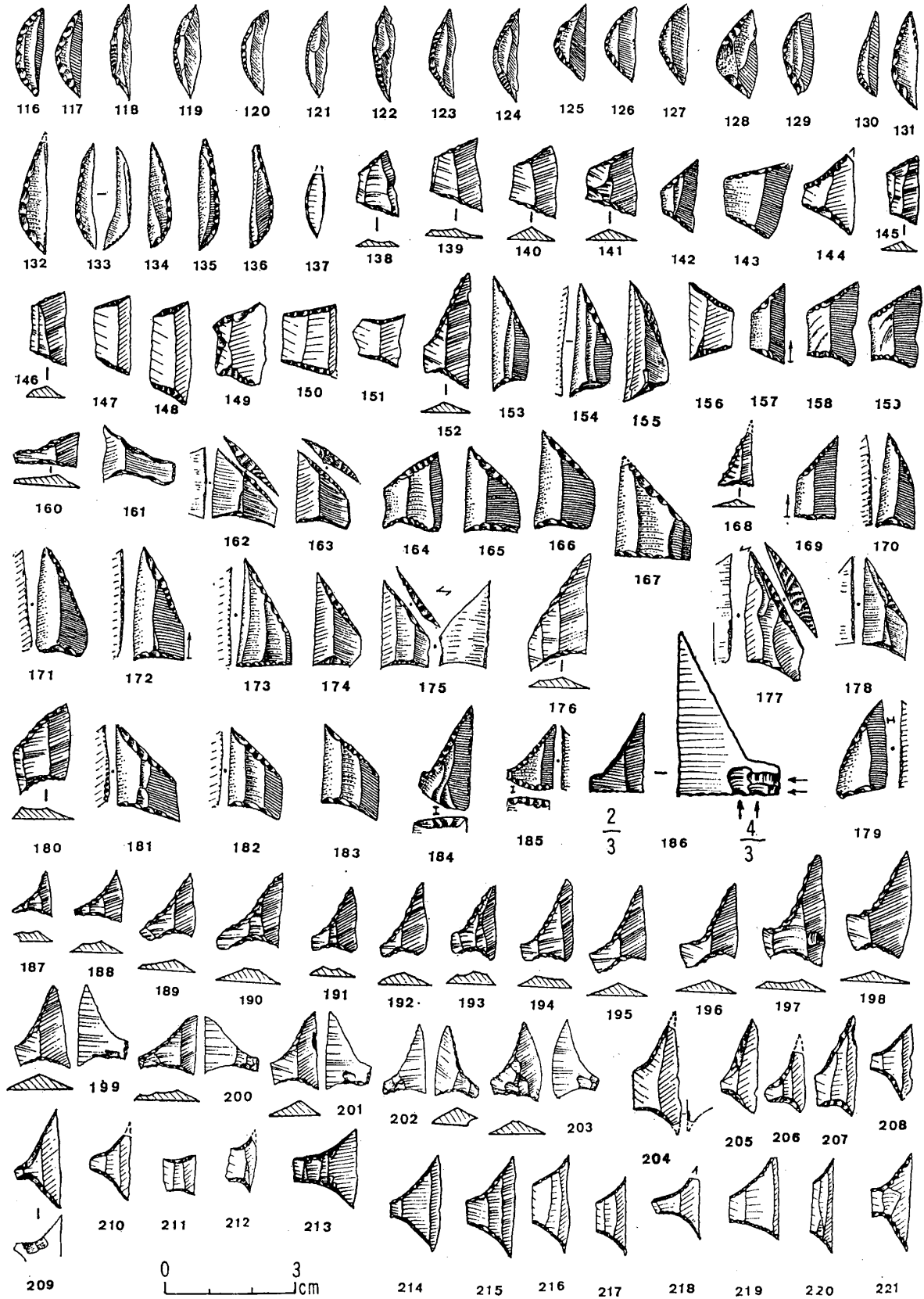


図4 G. E. E. M. (1969) の細石器の分類 (石器の番号は本文中に記載)

二つの截断面とほぼ平行する石刃もしくは細石刃の二辺とで構成される幾何学形細石器というのが定義である。Trapèze は 6 タイプに中分類され、そのなかをさらに細分する分類体系を採っている。小分類では、14に分類されることになる。Triangle とほぼ同じ数である。Triangle と同様に標準遺跡の名称を付けたものが数多くある。前の器種と同じようにタイプを列挙し、概略を述べることにする。ローマ字のついたものが中分類である。

I symétrique à troncature rectiligne (二つの截断面が直線で、同じ角度で対称形のもの)

symétrique à troncature très oblique (平行する短い辺が長い辺の半分以下のもの)〈図 4・138-144〉

symétrique court (平行する短い辺が長い辺の半分以下であり、幅よりも短いもの)〈図 4・149-151〉

symétrique long (平行する短い辺が長い辺の半分以上であり、幅と等しいかそれ以上のもの)〈図 4・145-148〉

II asymétrique à grande troncature rectiligne (非対称形であり、長い截断面が直線のもの)

asymétrique à grande troncature courte (長い截断面と長い辺の間の角度が45度以上のもの)〈図 4・156-159〉

asymétrique à grande troncature longue (長い截断面と長い辺の間の角度が45度未満のもの)〈図 4・152-155〉

III rectangle (片方の截断面が両辺に対し、直角に近いもの、この截断面の傾きは幅の1/6を越えないものとする)

rectangle à grande troncature courte (長い截断面と長い辺の間の角度が45度以上あるもの)〈図 4・160-167〉

de Vielle (=rectangle à grande troncature longue) (長い截断面と長い辺の間の角度が45度未満のもの、以前は「pointe de Vielle」と呼ばれていた)〈図 4・168-175〉

IV à bases décalées (短い截断面が長い截断面と同じ方向のもの、通常は長い截断面よりも角度は浅いが、限度は平行までとする。また短い截断面の傾きは幅の1/6以上とする、従来は Rhomboïde と呼ばれていたもの)

à bases décalées et grande troncature courte (長い截断面と長い辺の間の角度が45度以上のもの)〈図 4・180-183〉

à bases décalées et grande troncature longue (長い截断面と長い辺の間の角度が45度未満のもの)〈図 4・176-179〉

V asymétrique à grande troncature concave (長い截断面が凹状のもの)

du Martinet (rectangle で、長い截断面が強い凹状を呈するもの、あるいは二つの直線状の部分が連結し、窪みを作るものもよく見られる)〈図 4・184-186〉

de Montclus court (rectangle もしくは à bases décalées で、二つの截断面がはっきりと

細石器 (II)

凹状のものうち、長さとの幅の比が1.5未満のもの〈図 4・187-190〉

de Montclus long (上に同じく、長さとの幅の比が1.5以上のもの)〈図 4・191-198〉

なお、図 4・199-203は de Montclus avec retouche inverse である。

de Téviec (不等辺であり、二つの截断面が明確に凹状のもの)〈図 4・204-207〉

VI symétrique à troncatures concaves (両截断面がともに明確に凹状のもの)〈図 4・208-221〉

以上が、G. E. E. M. の幾何学形細石器のタイプ・リストである。Triangle と Trapèze との分類が詳しくなるのは、ヨーロッパ、特にフランス、ベルギーでは、細かい石器群の分析をしようとすると、ある意味では当然なのかもしれないが、機械的な分類と従来の標準遺物に則った分類との矛盾が顕著に現れているとも言えるタイプ・リストである。集団でやっているところに、こうした妥協の産物的な側面が、より顕著に出てきているのかもしれない。また、Triangle と Trapèze との間に分類方法の統一性がないことも「おや」と思わせるものである。内部に入っていない人間には、良く理解できないことの多い分類ではあるが、統計的に裏づけられていると思われる数々の数量的な基準を含む定義には見るべきものが多い。

標準遺物の名称がついているものは、空間的な分布の違い、時間的な差異などを鋭敏に示すものとして考えられている。それがどの程度なのかは、その詳細な研究内容のわからないものにとっては、判断のしようがないものである。確かに分類はでき、それはそれなりの意味を持っているのであろうと推測するだけである。しかし、機能的な面を考えると、それがどのような意味を持つのかは、かなり問題があるように思われる。何のために分類し、タイプ・リストを作るのか、その目的は何なのか、ここらあたりが十分には理解のできない分類と言うことになりそうである。極端な言い方をすれば、分類できるからした、標準遺物として認められているから採りあげたという感のある分類である。

5

幾何学形細石器の代表的な分類とそれに密接に関連しているタイプ・リストを利用した石器の分析方法について見てきた。特に、多彩な幾何学形石器が豊富にあるマグレブ、ヨーロッパ、なかでもフランス、の詳細な分類について、やや詳しく見てきた。

幾何学形細石器の分類は、基本的には、19世紀以来、その形により、Triangle(三角形)、Trapèze(台形)、Segment de cercle(半円形)、Rhomboidé(菱形)、Rectangle(長方形)の5大分類をするのが通例であるが、地域地域の幾何学形細石器の出土の様相により、地域に則したタイプ・リストを作る際には、除外されるものが出ることもあることを確認している。また、幾何学形細石器がもっとも多彩に、かつ多量に見られるマグレブあるいはフランスにおいては、三角形と台形の幾何学形細石器の分類が詳細になされていることも見てきた。一方、半円形と長方形の幾何学形細石器が主体である西アジアにおいては、本来ならば、これらの分類が詳細をきわめるところであろうが、まだ、類例が乏しいためか、調査・研究の歴史が浅いためか、そこまでには至っていない。

別の側面として、分類は詳細であれば、よりすぐれたものなのかという問題も生じているように思われる。見たなかでは、詳細という点では、マグレブについての Tixier の分類とヨーロッパ、特に、フランス、ベルギーを中心にした G. E. E. M. の分類が双壁であろう。詳細という点では、両者は同様であるが、基本的な理念という点では、大きな違いがあるように思われる。マグレブのタイプ・リストの製作者である Tixier も G. E. E. M. には参加している。しかし、結果としてできあがったタイプ・リストには、大きな違いが生じている。

Tixier のタイプ・リストは標準遺物に引きずられることなく、機械的な分類が貫かれている。技術的な側面を重視し、それに形態を加味した分類であり、統一のある分類といえることができる。これに対し、G. E. E. M. の分類は、標準遺物を重視した分類といえることができる。タイプ・リストを使った石器の分析法がなぜ出てきたかを考えれば、標準遺物中心では解決できなかった問題を別の視点から解決しようとしたからにはほかならない。両者は車の両輪のような形で、互いに足りないところを補いながら研究を進めるとい方向に進むべきものであったと思われる。ところが、G. E. E. M. のものは、二つの方法を混同して、一つの方法としているところに、大きな問題があるように思われる。もっとも、タイプ・リストを使用する分析方法が終末期旧石器文化の石器の分析にふさわしい方法かどうかという根本的な問題もある。詳しい分類を採れば、きわめて限られた地域にしか分類は有効に作用しないし、広い地域に適用することのできる大雑把な分類を採れば、一定地域のなかの詳細な問題には、用をなさないということになる。地方色が豊かになっている、この時期の石器群の分析にタイプ・リストを使用した分析が可能かどうかという問題である。その一つの解決策が Hours が採ったような詳細な分類と大分類の併用という方法であろう。

今回、このようにして、幾何学形細石器の分類をあらためて見直してみても、分類とは何なのかを考えさせられた。目的のあった分類、分類の先に何をしようとしているのかの目的のある分類が必要であることを痛感させられた。分類が広い範囲にわたって、統一されたものであり、相互比較できれば、確かに便利ではある。しかし、そこに何の哲学もなしの分類では、相互比較できたところで、大きな意味を持たなくなってしまう。それよりも、ばらばらであってもいいから、明確な分類目的を持った分類がそれぞれの研究者によって、なされるのがより解決への近道であるように思われる。また、これまでに見てきた分類は、形に捕らわれるあまり、大きさというようなものはほとんど顧みられていない。長さ、幅、厚さ、重さは幾何学形細石器にとっても、重要な属性である。このような属性に配慮した分類がなされるべきであろう。

最後に、幾何学形細石器の起源の問題に触れておくことにする。これは、簡単な問題ではない。ただ単に、見通しのみを見ることにする。幾何学形細石器が盛行するほとんどの地域において、幾何学形細石器は細石器の段階の後半になって、盛んに使われるようになる。まず、非幾何学形細石器が主として使われ、その後になって、幾何学形細石器が主要な石器になる石器群が現れる。西ヨーロッパにおいてもしかり、北アフリカにおいてもしかり、西アジアにおいてもしかりである。それぞれの地域において、細石器としてまず、出現する細石器の器種には、大きな違いがある。それ

細石器 (II)

それぞれの地域でこの段階において、数は多くはないが、マイクロ・ビュラン技法が見られる。

北アフリカでは、はっきりとはしないが、西アジアにおいても、西ヨーロッパにおいても、幾何学形細石器の器種が時期により、変化することも確実であるし、また、それにともない、マイクロ・ビュランの比率にも変化が見られるようである。

また、それぞれの地域において、主体となる幾何学形細石器の器種に違いが見られ、それは時期により変化する。すなわち、西ヨーロッパでは、三角形を主にするものから、台形を主にするものへ、北アフリカでは、台形を主にするものから、長三角形を主にするものへ、西アジアでは、長方形を主にするものから、半円形を主にするものへと、大局的に見れば、変化している。

マイクロ・ビュラン技法は、西アジアでもかなり盛んに使われるが、幾何学形細石器の量を凌駕するところまでは至らず、数がかかなりはっきりとわかっている遺跡の例からすると、マイクロ・ビュランの数は、多くても、幾何学形細石器の1/3以下、もしくは1/4以下でしかなく、多くの遺跡の場合には、1/10程度にとどまっている。これに対し、北アフリカのカプサ文化の遺跡では、幾何学形細石器と等量もしくは倍のマイクロ・ビュランが発見されていることは珍しいことではない。同じ北アフリカにあっても、オラン文化の遺跡では、マイクロ・ビュランの幾何学形細石器に対する比率は激減する。ヨーロッパにあっても、マイクロ・ビュランの幾何学形細石器に対する比率はさほど高くはなく、多い遺跡でも、半分程度のものが主であるようである。

このように見てくると、細石器の主になる器種においても、マイクロ・ビュラン技法のあり方においても、北アフリカ、西アジア、ヨーロッパはそれぞれ独自のあり方を示している。このような地域のとらえ方は良くないのかもしれない。もっと小さな地域ごとに独自の様相を示すといった方が良いのかもしれない。さらに、それぞれの地域は独自の展開をしており、大きく言えば、非幾何学形細石器から、幾何学形細石器へと移行するが、それぞれの地域には独特の変化があり、これまた一様ではない。それぞれの地域がその地域の文化伝統と環境との関わりの中で、独自に幾何学形細石器を生み出したと考えるのが妥当であろう。

参 考 文 献

- 芹沢長介 1974 石器の種類と名称『古代史発掘 1 最古の狩人たち』:64-80 講談社
藤本 強 1976 型式と分類『日本の旧石器文化 5 旧石器文化の研究法』:147-216 雄山閣
藤本 強 1990 細石器 (I) 東京大学文学部考古学研究室紀要 9:1-23
Albarellò, B. 1987 Technique du "coup du microburin" par pression. Bulletin de la Société Préhistorique Française 84:111-115.
Bordes, F. 1950 Principes d'une méthode d'étude des techniques de débitage et de la typologie de Paléolithique ancien et moyen. L'Anthropologie 54:19-34.
Bordes, F. 1961 *Typologie du Paléolithique ancien et moyen*. Delmas.
Brézillon, M. 1983 (première édition 1968) *La Dénomination des Objets de Pierre taillée*. N^e supplément à Gallia Préhistoire. Centre National de la Recherche Scientifique.
Escalon de Fonton, M. et H. de Lumley 1955 Quelques civilisations de la méditerranée septentrionale et leur interurrences. Bulletin de la Société Préhistorique française 52:379-394.

- Escalon de Fonton, M. et H. de Lumley 1956 Les industries Romanello-Aziliennes. Bulletin de la Société Préhistorique française 53:504-517.
- Escalon de Fonton, M. et H. de Lumley 1957 Les industries à Microlithes Géométriques. Bulletin de la Société Préhistorique française 54:164-180.
- G. E. E. M. 1969 Epipaléolithique-Mésolithique Les microlithes géométriques. Bulletin de la Société Préhistorique française 66:355-366.
- G. E. E. M. 1972 Epipaléolithique-Mésolithique Les armatures non géométriques-1. Bulletin de la Société Préhistorique française 69:364-375.
- G. E. E. M. 1975 Epipaléolithique-Mésolithique L'outillage du fonds commun-1 Grattoirs-éclats retouchés-burins-perçoirs. Bulletin de la Société Préhistorique française 72:319-332.
- Hours, F. 1974 Remarques sur l'utilisation de Listes-Types pour l'Etude du Paléolithique supérieur et de l'Epipaléolithique du Levant. Paleorient 2-1:3-18.
- Laplace, G. 1966 *Recherche sur l'Origine et l'Evolution des Complexes Leptolithiques*. Rome.
- Laplace-Jauretche, G. 1954 Application des méthodes statistiques à l'étude du Mésolithique. Bulletin de la Société Préhistorique française 51:127-139.
- Laplace-Jauretche, G. 1956 Typologie statistique et évolution des complexes à lames et lamelles. Bulletin de la Société Préhistorique française 53:271-290.
- Laplace-Jauretche, G. 1957 Les Industries de Roc'h-Toul et de Parc-ar-Plenen en Guiclan (Finistère). Bulletin de la Société Préhistorique française 54:422-438.
- Leroi-Gourhan, A. 1966 Tableaux de morphologie descriptive. Dans: Leroi-Gourhan, A. ed. *La Pré-histoire*. Nouvelle CLIO 1:245-271, Presses Universitaires de France.
- Marks, A. E. ed. 1976 *Prehistory and Paleoenvironments in the central Negev, Israel*. vol. I Southern Methodist University Press.
- Octobon, E. 1935 Recherches sur la technique du «coup du micro-burin». Bulletin de la Société Préhistorique Française 32:582-585.
- Rozoy, J. G. 1978 *Les Derniers Chasseurs*. Société archéologique champenoise.
- Sonneville-Bordes, D. de et J. Perrot 1953 Essai d'adaptation des méthodes statistiques au Paléolithique supérieur. Premiers résultats. Bulletin de la Société Préhistorique française 50:323-333.
- Sonneville-Bordes, D. de et J. Perrot 1954 Lexique typologique du Paléolithique supérieur. Outillage lithique. I Grattoirs - II Outils solutréens. Bulletin de la Société Préhistorique française 51:327-335.
- Sonneville-Bordes, D. de et J. Perrot 1955 Lexique typologique du Paléolithique supérieur. Outillage lithique. III Outils composites-perçoirs. Bulletin de la Société Préhistorique française 52:76-79.
- Sonneville-Bordes, D. de et J. Perrot 1956a Lexique typologique du Paléolithique supérieur. Outillage lithique. IV Burins. Bulletin de la Société Préhistorique française 52:76-79.
- Sonneville-Bordes, D. de et J. Perrot 1956b Lexique typologique du Paléolithique supérieur. Outillage lithique. V Outillage à bord abattu - VI Pièces tronquées - VII Lames retouchées - VIII Pièces variées - IX Outillage lamellaire. Pointe azilienne. Bulletin de la Société Préhistorique française 53:547-559.
- Tixier, J. 1963 *Typologie de L'Epipaléolithique du Maghreb*. Arts et Métiers Graphiques.
- Vignard, E. 1923 Une nouvelle industrie lithique. Le «Sébilien». Bulletin de l'Institut française d'Archéologie orientale 22, separata, 76pp.
- Vignard, E. 1928 Une nouvelle industrie lithique: Le Sébilien. Bulletin de la Société Préhistorique française 25:200-240.

細石器 (II)

- Vignard, E. 1935 Le microburin est-il Sébilien ? (réponse au Cdl. Octobon). Bulletin de la Société Préhistorique française 32:649-658.
- Vignard, E. 1936 Recherches sur la technique du Coup de Microburin. Bulletin de la Société Préhistorique française 33:234-235.
- Zotz, F. 1932 Kulturgruppen des Tardenoisien in Mitteleuropa. Praehistorische Zeitschrift 23:19-45.

Microliths (II)

—Classification of geometric microliths—

Tsuyoshi FUJIMOTO

Geometric microliths are found in Europe, western, central and southern Asia, and Africa. They flourished in the area around the Mediterranean in broad sense. Their classification has been carried out since the 19th century and they have commonly been classified into five types: Triangle, Trapeze, Lunate, Rectangle and Rhombe.

From 1950 to 1970, statistical methods flourished in the analysis of lithic assemblages and many classifications were proposed to compare microlithic assemblages, mainly in France. Most of them consisted of traditional *fossile-directeur* and standard types. It is contradictory to adopt *fossile-directeur* as a list-type, because the statistical method's objective was to compare all stone tools in an assemblage as a different method from analysing *fossile-directeur*. Therefore, it is desirable to avoid types of *fossile-directeur* in type-lists. Among many classifications, Tixier's (1963) is thought to be the best one. His classification is based on the technology of making microliths and precise definitions of types, technology and morphology. He did not adopt *fossile-directeur* as a list-type. Of course, his method was proposed for analysing the north African microlithic assemblages, especially those in the Maghreb, however, it had some generality, therefore, it became the standard classification of microlithic assemblages.

As microlithic industries have a lot of regional variation, it is very difficult to make classifications of stone tools. When one adopts one type which was only found in limited time and space, this classification cannot be used in comparing microlithic industries of wider regions. On the other hand, when one avoids this special type in one's list, one cannot do a precise comparison of the development of microlithic industries in a local region.

Geometric microliths of northern Africa, Europe and western Asia are different from each other in their types and ratio of micro-burins, therefore it can be assumed that the origin of geometric microliths is not a single one, but they might have originated from the local microlithic industries of each region.